

桜蔭俳話会 十月句会 (第三一九回)

平成二十五年十月二十日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

【鑑賞】

ちぐはぐなははとの会話青蜜柑

秀一

老親介護は重いテーマであり、なかなか良い句にはなり難いが、掲句は「ちぐはぐな会話」と切り取ることで成功した。噛み合わない会話であるけれども母との貴重な時間を過ごしている作者の姿が目につかぶ。青蜜柑との配合が絶妙であり、句を明るくしている。

【鑑賞と添削】

引き合いて秋の声聴く糸電話

幸

歳時記の「秋の声」の項の説明によれば、「秋になると様々な物音の響きが敏感にしみじみと感じられる。具体的な音だけでなく、心耳で捉えた秋の気配をもう」とある。直裁的には、秋を擬人化し、その秋が発した声ということではない。したがって、秋の声を糸電話を通して聴くという着想には少し違和感がある。作者が秋の声を感じ取っている傍らで子供らが糸電話を取り合っている光景なのであるか。そうだとすれば、秋の声と糸電話は切り離れた方がよい。例えば次に示すように。

秋声や引き合いてゐる糸電話

【鑑賞】

燐寸箱朝顔の種納めけり

秀一

春蒔きの朝顔の種を秋に採取した。通常では小分けの紙袋に入れて保存するのであるが、掲句では燐寸箱に収めたのである。昔は居酒屋には宣伝用の燐寸箱が置いてあり、また、雑貨屋などで売っていたが、今は生活必需品としての燐寸は目にする事はない。しかし、然るべきところに行けば、まだ小箱に入れた燐寸が売られているという。燐寸が有り触れた存在であったときには、ごく普通と思われる句であるが、燐寸が希少な存在である現在では、その意外性に惹かれる作品である。

【鑑賞】

落ちてゐるやんまの翅のふるへかな

麻衣

路上に落ちてゐる蜻蛉が翅をふるはせてゐるのを発見した。この「ふるへ」は振るえであろうか、あるいは震えであろうか。前者であれば、一時着地した蜻蛉が再び舞い上がるために翅を振っている光景になる。後者であれば、衰えによって地上に落ちた蜻蛉が再浮上を試みているが、それに失敗している光景になる。いわゆる断末魔の震えであろう。とすれば、上五の「落ちてゐる」はいささか説明的ではあるが、後者の解釈へスムーズに誘導する。この意味では、外せないフレーズなのである。落ちてゐる蜻蛉が、大型蜻蛉である「やんま」であれば、なおさら、冷涼な秋の日の中に終焉を迎える命の儚さがひしひしと感じられる。

【鑑賞】

細胞の六〇兆個そぞろ寒

麻衣

人体を構成する細胞の数は六十兆個。その全てにおいて「そぞろ寒」を感じている。心でうすら寒さを感じ取っているという普通の心情的な句立てではなく、全身でそぞろ寒を感じているとの体感的な句立てである。着想が秀でている。体全体でそぞろ寒を感じているというのであれば、「細胞の」をはっきりと「体細胞」とすることもできるのではないか。

【鑑賞】

吹き返す風の下手に野紺菊

明美

まさしく肩筋から力を抜いた自然詠である。吹き返す風は、いわゆる台風通過後の吹き返しの風であろうか。その風の中に野紺菊を発見した。台風に吹き倒されずに凜々しく立っている野紺菊を見たとき、人はこのように頑張つて生きようと思う。

【自句自解】

雨に濡れ光の波の草もみぢ

守

草もみぢの小揺れに光の波を感じ取つての句である。「雨に濡れ」はそのときの気象条件であり、少し説明的ではあるが、「光の波」を増幅させようとしたもの。

【鑑賞】

芒挿す一升瓶の店に入る

ツル子

ひと恋しく、温め酒が恋しい時期である。一升瓶に芒を挿し、月を祀っている居酒屋を見つけた。気の利いた料理屋であれば、もっと別の高価な器に挿すのであろうが、一升瓶であるところに店主の月を愛でる素朴な心持を感じ取つたのである。作者は、一升瓶の芒が見えるところに坐り、美味しい酒に至福の時間を過ごしたことであろう。一升瓶と芒の句は、色々あるが、「店に入る」端的にしめたところが良い。

【鑑賞】

秋灯や向かひの席に置く鞆

麻衣

鞆を置いたのであるから、向かいの席は通常、空席である。これから様々な想像が生まれる。待ち合わせの約束をした店に相手の姿はまだ見えないが、その恋人の席を確保するために、向かいの席に鞆を置いた、と思う人。やつと残業を終えたキャリアウーマンが遅目の夕食をとるために店に入り、ああ疲れたとばかり、向かいの席に鞆を置いた、と思う人。読み手に色々な想像の余地を与える俳句は佳い俳句である。

【自句自解】

祖谷溪の音の一つに秋の風

守

ある吟行の途次、祖谷溪に立ち寄つた。溪谷は静まり返り、耳に入るのは、吹き渡る風が立てる音だけであつた。都会の喧騒にいては、決して得られない一句を賜つた。

【鑑賞】

こはごはとひよこ抱く児や天高し

友子

恐々としているのは、ひよこを抱いている子だけでなく、抱かれているひよこも同様であろう。ひよこ広場に幼稚園や保育園の園児が訪ずれた。ふわふわとした生命体を初めて手に取る園児は、まさにこわごとそつと手に取り、暫くして胸に抱き上げるであろうが、元氣一杯の園児は大きな歓声を上げてひよこを掴み、すぐ胸に抱きしめる。ひよことの接し方は園児それぞれであろうが、晴れ渡る秋の空のもとに、鶏のひよこと人間のひよこが、あたたかな命の交歓をしている。天高しとの配合が良い。

【鑑賞】

秋茜群れをはづれし自在かな

友子

赤とんぼはいつも群れをなして整然と行き交っている。そこに群れを離れた一匹の赤とんぼが、悠然と自分の呼吸で独自の軌跡を描いて飛んでいる。この自由自在な飛翔に作者は、家族や社会のしがらみから抜け出した自分の姿を重ね投影しているのかも知れない。「自在」という言葉の選択が良い。

【鑑賞】  
猫へ乳鳥に米撒く秋日かな

秀一

穏やかな秋日のもとに、猫の餌皿に牛乳を注ぎ、舞くる小鳥のために米粒を撒いている。ここまで生きてきたわが生を慈しむのと同じように、日常生活を共にする周辺の生き物を慈しんでいる。

【鑑賞】  
小鳥来るレストハウスの木椅子かな

明美

公園をしばらく散策した後、レストハウスのテラスの木の椅子に足を休めている。人生のある一瞬間に用意された休止符を楽しむかのように、小鳥の鳴き声と秋風を聴いている。小鳥来ると木椅子との斡旋が良い。

【鑑賞】  
健脚の昔のありし赤とんぼ

幸

健脚であった頃、遠くまで散策し、山路を駆け巡ったものである。それと同じように赤とんぼは自由自在に空を行き交っている。追憶の句であるが、現実の空を行く赤とんぼを前面に打ち出すことによって、現在に引き戻している。

【鑑賞】  
同病を励まし合ひぬ敬老日

清子

「同病相憐れむ」という言葉がある。これには、その病気を快復が望めない固定的なもの捉え、それを共に憂いているという、消極的なイメージがある。しかし「同病励まし合う」には、その病を回復の希望のある流動的なものと捉え、病苦に共に立ち向かおうという積極的なイメージがある。長寿化が進む今日、病を得て敬老日を迎える人は年々増え続けるであろうが、掲句のような心持ちでいたいものである。

【鑑賞】  
シーズンに子の姿なく木の実落つ

清子

シーズン遊びに飽きた子供らが、木の実拾いに興じているのであろうか。それとも、シーズンも空っぽであり、木の実を降らす木の下にも子供らの姿が見えないのであろうか。遊びの名人である子供らは、次々と遊びを考えて、木の実拾いから次の遊び場所に移動してしまったのかも知れない。誰もいない児童公園では、子供らが舞い戻って来るのを待つかのように、木の実が降り続けている。

【鑑賞】  
マンシヨンの暗証ボタン柘榴熟る

秀一

部外者の立ち入りを禁止するため、この頃のマンシヨンのエントランスには、暗証番号を入力するための操作パネルが設置されている。操作パネルに配列されているキートップと柘榴の実は、硬質感において共通項がある。マンシヨンの玄関脇から柘榴の木が見え、その実が熟れているという事実に触発された句である。面白い取り合わせである。

句の鑑賞は読み手に委ねられているとすれば、評者には、「柘榴の実が熟れる」と置くことによって、堅固と思っているセキュリティ対策も簡単に破られてしまうことがあり得る、ということを示しているように思える。

【鑑賞】  
日時計の影くつきりと運動会

友子

朝一番に起き、家族の人数分の弁当の準備、はしゃぎ回る子供の身仕度を気忙に済ませ、運動会に向かう。開会の挨拶に耳を傾け、種々のレースに見入っているうちに日は高く上り、校庭の隅に立っている日時計

は、その影をくつきりと落としている。日時計に影が出来ることは、その機能上当然予定されていることである。しかし、作者は、「影くつきり」と置くことによって、慌ただしい一日の中における現在の時間と空間を確認し、元気に育った子供の姿を実感している。

【鑑賞】

うねる波赤青緑の運動会

幸

昔日の運動会では全校のクラスは赤組と白組に二分され、応援合戦が繰り広げられたが、この頃は色分けはもつと多彩になったようである。応援に参加する児童生徒の動きや歓声の総体を「波」と捉え、この波を「うねる」と形容したのは巧い。

【鑑賞と添削】

園芸店に思ひのままの秋の蝶

清子

春の蝶、夏の蝶、秋の蝶、冬の蝶と並べたとき、秋の蝶に「思ひのままに」を感じる感性は良い。活動限界点が間近に迫った晩秋だからこそ、思ひのままに飛び回ってほしいものである。ただし、場所設定としての「園芸店に」は一考を要する。場所限定はする必要はないか。例えば、次のようにすることもできる。

秋蝶の思ひのままの影一つ

【鑑賞】

自転車の子の胸に赤い羽根

邦子

遠くから誰か自転車でやって来る。近付いて来ると中学校の生徒らしい服装をしている。目の前を通り過ぎるとき、その制服の胸には赤い羽根が差されていたのを見た。

生徒の胸に赤い羽根が差されているという静かな事象も、「自転車の」というフレーズを冠することによって、動的な俳句に転化して鑑賞することができ、目の前に「赤い羽根」が印象強く浮かび上がって来る。

【鑑賞との添削】

何にでも縋りて葛の葉果てもなし

ヤエ子

一面に広がる葛原を目にして、葛の繁殖力、生命力の強さを感じた、との句である。しかし、何にでも取り付いて繁茂するのは、葛の属性であるから、これをストレートに句に取り入れたときには、説明句となり易い。これを脱するには、何らかの操作が必要である。例えば、真逆にして、縋るもの頼るものは何もないとし、しかも、その主体は葛ではなく人にすることも考えられる。例えば、次のようにすることができる。

我とうに頼るものなし葛の原

【鑑賞】

横浜の秋風強く迎へらる

麻衣

俳句は、訪れた土地や出迎えてくれた人に対する挨拶から始まる。

二俣川の自然こども公園を主目的地とする吟行句会は、吹き降りの大雨によって止むなく中止となり、持ち寄り句会に変更された。本会では初めての中止である。

掲句は、当日のメンバーの最大の関心事であった気象条件をさつと一句に読み込んだものである。

【鑑賞】

十三夜酔李白の図吊しけり

秀一

月を愛でる一間に軸物が掛けられている。吊したのは「酔李白の図」であるという。この分野の素養がからきしない評者には、その構図や描法などの詳細は不明である。そのため深い鑑賞をすることはできない。風流風雅には極みがないが、月満ちる十五夜にその画幅を掛けたのではなく、十三夜としたところが良い。

【鑑賞】  
東天紅ひと声高き秋の空

ツル子

晴れ渡った秋空に東天紅の鳴き声が爽やかに一つ響いた、という句である。東天紅は、東の空が紅くなったことを知らせる意味込めた当て字で、暁に鳴く鶏の声である。掲句が旅吟であるとすれば、土佐原産の長鳴鶏のことであろう。この鶏は、鳴き声が長く抑揚があるとされる。

このように東天紅は、元来その鳴きぶりを愛でるものであるから、東天紅の鳴き方を眼目とした句は難しい。掲句は、ひと声「高き」として天高しの「高しにつなげたものである。これには一定の俳句的感興はあるが、まだ常套の域を脱していない。鳴く東天紅に対して、よく鳴かない東天紅を考えるのも一法である。高くて長いひと鳴きを期待して行ったのに、なかなか鳴かない東天紅、あるいは鳴くには鳴いたが、期待した程ではなかったという、その落差を詠むのである。例えば、次のように。

天高し東天紅のさりげなし

【鑑賞】  
黄落期清掃員のみな寡黙

明美

街角に見かける清掃員は、無駄口をたかかず、てきぱきと作業を進め、清掃車は次のゴミ集積所に向け発進する。掲句の清掃員は清掃車に添乗する清掃員ではなく、公園などに配置され、自分で落ち葉を掃き集める清掃員のことであろう。このような職業としての清掃員だけでなく、紅葉を観賞する間もなく降り積もる自宅の庭木の落葉の処理に閉口する時期柄である。「みな寡黙」には実感がある。

【鑑賞】  
読み返す母の歌集や秋夜長

幸

秋の夜長に、いつか読もうと気になっていた母の歌集を取り出したのである。その歌集には、自分や家族を読み込んだ短歌も収められており、母との楽しい時間を深く思い出したかも知れない。しみじみとした雰囲気であり、夜長の季語が効きすぎる程、効いている。「秋夜長」は秋を消して、「夜長し」で良いと思う。

【鑑賞と添削】  
ままごとも遠き日となりたでの花

友子

今時、ままごと遊びの光景に出合うことは珍しい。作者は、偶々ままごと遊びを見かけ、それに触発されて掲句を得たのであろう。ただし、蓼の花はままごと遊びの材料としてよく使われたものであるから、ままごとの追憶の句中に蓼の花を持ち込むことは避けた方がよい。また、蓼の花を見て、ままごとの句ができたのであれば、安易な連想と言えよう。ままごとの材料とならなかったものを配合するのがよい。例えば、つぎのように。

ままごとの遠き日となり鴉日和

【鑑賞】  
合掌の大屋根小屋根草の実飛ぶ

幸

飛騨高山を訪れたとき、句会に出される句の筆頭は、合掌造の句である。それだけに類句類想とならないように注意しなければならぬ。作者は、大屋根だけでなく、小屋根も合掌造であるとし、それらの屋根に自生した野草が実を飛ばしているとした。叙景句として工夫している。

【鑑賞】  
日時計の陰も細まり秋の蝶

ツル子

運動会の句において日時計の影がくつきりと見える、という句があつたが、掲句では場所設定はない。日時計の陰が細まったということと、陰にまといつくように飛び回っている秋の蝶のことだけをいっている。そ

れだけに、「陰の細まり」の意味内容が何であるのかが重要となるが、評者にはまだ得心の行く理解はできていない。「陰の細まり」の解釈によっては、深いことを詠んでいるのかもしれない。不思議な気にかかる一句である。

(文責 代表 増田 守)

「不在投句 古野明美、原田清子」

「事務局よりお知らせ」

① 十一月句会は吟行会となります。

十一月二十三日(土)、こども自然公園(旭区)

集合 相鉄線・二俣川駅改札口、十時。

(十月の吟行は、大雨のため中止。急遽、定例の句会としました)

② 十二月の定例会

・日時 十二月二十三日(月) 午後一時三十分

・場所 旭区民文化センター・サンハート